

「ヒロちゃん、ヒロちゃん！ 何書くか決めた？」

親友の川辺が隣の机から身をのりだし広子に話しかけた。ペンを握りしめながら、首を縦に振った。

広子の通う小学校では、木曜日以外の全てに国語の授業があった。二年生ということもあり漢字を覚えるのは簡単で、なんなら楽しく授業を受けていた。

そして今、夏休み明け最初の国語。夏の思い出を一枚の絵と簡単な作文にする課題が渡された。三時間をかけて作るもので、完成後は廊下に張り出され、一ヶ月後の授業参観日に保護者に見て貰うのだ。

「私さ、夏休みに海と山行ったんだー。どっちも楽しかったんだけど、選ぶって言われたら悩んでて。どっちが良いと思う？」

「うーん。海かな」

「お、珍しいね。分かった、クラゲに刺されたの書く」

「大丈夫なの？」

「へーきへーき。怖かったけど」

自分の机に戻り黙々と絵を描く川辺を横目に、広子は四百字の原稿用紙の初めの行に鉛筆を置いた。

書き始めはこうだ。

「私は夏休みに魔法使いさんに出会いました」

夏休みが始まって二週間が過ぎた頃、広子は母に連れられ県内にある動物園に来ていた。およそ二百種類もの動物が、それぞれの生態系に合った形で展示されている。目玉は三頭のゾウと百羽以上からなるペンギンの大行進であり、後者に関しては盛大な拍手で見送った。

しかし、広子の興味を引いたのは一匹の蛙だった。五十センチ程の正方形のガラスの奥に土と苔が敷き詰められており、倒木を模したオブジェと土から生える幾本もの草花が特徴的な展示スペースだった。その一角に蛙はいた。黄緑色の肌に茶色の斑点がいくつもあり、顔の半分を占める丸く大きな目を持っている。決して言葉が通じる相手ではないはずなのに、隅で佇む蛙と見つめ合う内に互いのことを何故か理解できたような気分になったのだ。

蛙との運命的な出会いを果たしたのは入園から退園までの中ほどであった。色とりどりの鳥類が飛び交う巨大なケージや、目玉のペンギンを後に控えていたが、そ

のどれも広子に強い印象を残すに至らなかった。

出口付近には飲食店とグズズシヨップが向かい合って並んでいた。昼ご飯を食べながら動物園に入ったため、空の一次片も赤らんでいない今、夕食には早すぎる。

ショウウィンドに並ぶ皿には、ゾウやペンギンが型どられたチキンライスの上にケチャップで顔が描いてあるものや、丸い耳の形をしたクッキーが乗っているサルを模したチョコレートソフトクリームなどの食品サンプルがあった。広子自身も空腹であるとは感じていなかったが、ソフトクリームだけでもぜひ食べたいと、ガラス越しにそれらを見つめていた。

「ヒロちゃんアイス食べたいの？」

母は広子の目線に合うようにしゃがみ、見惚れていたアイスを指差した。母は料理の準備を手伝った時なんかに見せる笑顔をしている。広子は直感で、このまま首を縦に振ればアイスが食べられると理解した。しかしそうしなかった。たどうつむいて母が視界から消えるのを切に願った。

「そっか。じゃあお土産屋さん行こう」

そう言う母は両手を使って立ち上がった。歩く速度は広子が小さい頃から変わらない。早すぎず、遅すぎもしない。母が常に車道側に立ち、その斜め後ろに広子は立つ。母は常に先導してくれていた。未知の場所しかなかった広子にとって、これからの行き先を正確に示してくれる背中と、どんな時でも笑っている横顔は頼もしくかけがえのないもの思えた。

今回も手を引いてもらえると期待していた。けれども母は一向に歩こうとしない。グズズシヨップの方を眺めて立ち止まっていた。広子は母が動くのを待った。

「行かないの？」

「ん？ ああ、ごめんね。ちょっと考え事してた」

広子は母の手に引かれ、グズズシヨップに入店した。

自動ドアが心地よい音と共に滑らかにスライドすると、冷たい風が肩まで伸びた髪を揺らした。八月の猛暑はとどまるところを知らず、広子にも多量の汗と幾度もの給水という形で影響が現れていた。広子の着用している胸にでかかとリンゴの刺繍がある白の半袖やショートジーンズは酷くべたついている。そのような芯まで熱気で浸された体には最高のほどこしだった。

だがその感動は突風にさらわれ、消えた。上書きされたのだ。右から左へ、見渡す限りかわいらしいぬいぐるみや雑貨で埋め尽くされていた。店内は広子の住むマンションの一式と同程度の広さであり、決して規模は大きくなかったものの、それが密度の高さに転じている。

広子のはかわいいものに目がなかった。自室にはこれまで訪れた動物園や水族館で買ってもらったぬいぐるみで溢れている。寝る前に誰を枕元に置こうか悩むのが、

広子の密かな楽しみだった。

「好きなもの買ってあげるから一個だけ選んできてね」

「うん」

一時的に母と別れた広子は店内を歩いて回った。壁際には大きな棚にぬいぐるみが並べられており、外側から中心に行くにつれ棚は小さくなっていった。店の中央には円形の台があり、結婚式のケーキのように縦に台が連なっている。それに沿う形で動物がプリントされた飴やクッキーなどの菓子や、ミニサイズのぬいぐるみのキーホルダーがズラリと並んでいた。空いているスペースには動物園内にいる動物の写真が貼られていたり、色とりどりの造花が装飾として使われていた。

それ以外にも筆記用具や手帳、鞆やリュックなど、多彩な品々が至るところに散りばめられていた。この中から一つ、広子には学校で出されるどんな算数の問題よりも難しく感じた。

自分で金を払って欲しいもの全てを買えたらどんなにいいことか。そうすればこの悪癖は綺麗さっぱり消えてくれるのだろうか。

広子の倍以上ある高さの棚を前にした時、思わず二度見をした。広子の心を奪った黄緑色の蛙が、赤いブレスレットの上に鎮座していたのだ。ただ値札の文字を読むとオリジナルとは書かれていなかったため、正しくはあの蛙と同一ではない。その点が非常に残念ではあるが、広子の気持ちは完全に腕輪に傾いていた。

ふと視線を横に移すと、値札の側に「大人気 蛙シリーズ」の赤い集中線の引かれた見出しと、黄緑色以外の蛙達が同じようにブレスレットについている写真があった。顔と腹には目が痛くなる程の赤で手が青い蛙、群青色の体に黒の斑点がある蛙等々、合計五つの種類があるようだった。しかし蛙が居た場所には黄緑以外には見当たらず、更には残り一つであった。広子には運命のように感じた。

これしかない。広子は震える指でブレスレットを掴もうとした。

「あ……ごめんねー。ちょっと前通るね」

直感で広子に向けられた言葉であると理解した。後方に居るであろう声の主へと振り返ると、動物園のロゴが左胸にプリントしてある服を着た女性が立っていた。首からかける名札には大きく名字が書かれてあるのだが、漢字を習い初めて一年弱の広子にとって読むことは不可能だった。せいぜい判読できたのは縦と横に圧縮された山と大の二文字のみである。

しかし相手の名前が何かという理解の及ばない事は広子には興味なかった。彼女が両手いっぱい溢れんばかりの蛙達を抱えていたのだ。黄緑色だけでなく、写真にのみ姿があった赤や青の蛙もその中にいた。広子が母にねだってやっと一つ手に入る代物を、背後に現れた女性は数えきれないほど持っている。たまらなく羨ましく、そしてそれ以上に非現実的な存在に対する憧れがあった。

母や友人となに不自由ない会話を繰り広げる広子であったが、女性を何と形容すれば良いか分からなかった。脳をかきまぜ必死に言葉を探した。

「……魔法使いさん？」

行き着いたのは近頃広子のブームとなっているテレビアニメだった。主人公の魔法使いはピンク色の光の粒子から様々なものを作り出すことができた。悪の怪人を倒すために奇想天外な物を作ることもあれば、日々の生活を彩るためのスイーツや助けた子供にプレゼントを送ることもある。やりたいを可能にする画面の奥で活躍する女の子に、広子は彼女を重ねた。

「え……え？ 私？」

「リンちゃんにそっくり！ その蛙も魔法を使って出したの？」

女性は困ったなといった様子で、蛙を棚に並べて自由になった人差し指で頬を掻いた。広子はどうやって蛙を出したのか、仕事が終われば町に現れる怪人を倒したりするのかなど、テレビの奥で活躍する美少女に直接聞きたいことを確かめるために女性の周囲を跳ね回った。店内の客や店員は騒がしさに気が付き広子らの様子を横目で見ていた。その中に母もおり、慌てて広子の手を引っ張った。

「うちの子がごめんなさい！ 店員さんに迷惑かけちゃダメでしょ！」

広子は女性から離され、母に優しいながらもこっぴどく注意を受けた。

「店員さんは魔法使いじゃないからね。魔法使いはリンちゃんでしょ？」

リンちゃんは件のアニメの主人公だ。赤が輝く膨らみの大きいボブヘアと紅色のルビーのような透明感のある目を持っている、元気潑刺な少女だ。対して未だ困惑の表情を浮かべる女性は、黒のロングヘアで茶色がかった黒い瞳だ。元気いっばいでかわいらしいというよりは、爽やかでカッコいい出で立ちをしている。似ても似つかない。

「ごめんなさい……」

「もうしなかったら良いの。さ、ヒロちゃん。何買うか決まった？」

広子はもちろん黄緑色の蛙のブレスレットだ。そう答えるつもりだった。文字列は心の中で自然と繰り返せるまでに仕上がっており、内容にも不備はない。けれども声に出せない。喉まで昇ってきた言葉が強い力で押さえつけられているような感覚だった。誰がそうさせているのか。もちろん広子自身以外にはなし得ない。

物心のついた時から、広子には発言を極端に避ける癖があった。きっかけがあったのかどうか、記憶にはない。学校の授業で手を挙げずにクラスメイトが答えるのを待つことは、成人し社会に出た後であっても起こるが、広子の場合には友人や親が相手でもその癖が邪魔をする。自分に決定を委ねられたその瞬間、広子の頭は決断を下すことを頑なに許さないのだ。胸の内にあるのは焦りと恐怖。この判断が後に尾を引いたら、相手に不快感を与えたら、今後話してくれなくなったら、これらの

存在するかどうか不明な負の可能性が広子を強く拘束していた。

広子はじっと俯く。涼しい室内であるにもかかわらず、一粒の冷たい汗が額を伝った。服の裾を両手で握り、母が次のアクションを起こすまでひたすらに待った。

「じゃあー……」

母は大きな棚に向かって歩いていった。そして二つのぬいぐるみを持って広子に見える位置で掲げた。右手にはライオン、左手にはペンギンがあった。どちらも動物園のオリジナルであり、ブレスレットよりも約千円高い。自室のコレクションに加える価値のある代物だった。

「お母さんさ、お店の中探したんだけどこの二つが良いと思ったんだ。かわいいでしょ？ どっちかにしよーよ」

「……………」

広子は答えなかった。数秒の沈黙であつたはずが、数分、もしや数時間経つたのではないか。時間が無理矢理に引き延ばされている感覚だ。情けなかった。眼球が液体に浸され、辺り一面が揺らいでいる。理解すらしていない表面張力にもすがって、水滴が落ちないように眼底に強く力を入れた。この顔が母に見られることを何よりも避けたい広子にとって、前髪を伸ばしていたことは幸運だった。

「じゃあ帰ろっか」

母に手を引かれ、広子は店を後にした。広子は小さく鼻をすすり母について歩くが、チラリと視界に入った母の横顔は、とても笑顔であるとはいえない。はるか遠くをぼんやりと見つめている、表情が切り替わる瞬間を捉えたかのような真顔だった。

広子の父親は広子が産まれた年の十月に事故によって帰らぬ人となった。母はその話をしながらないため当時の詳細な状況は知るよしもない。父を感じられるのは赤ん坊の広子を抱えるカメラ目線の男性の写真と、母の薬指にはまっているその男性と同じ指輪だけだ。

女手一つで子供を育てているため母は働き詰めであった。早朝に起き家事を済ませ、広子を保育所に送り届ける。空が暗くなった頃に汗をたらしながら迎えに来る。オーバーワークな母を、広子は夕食の手伝いや洗濯物を畳むといったことでしか助けられない。そんな忙しい母は何ヵ月かに一度、近場の動物園に連れていってくれた。その日だけは母に仕事を忘れてもらおうと全力で楽しむのだ。

今回は飽きただろうからと母の提案で二つ県を越えた動物園にまで足を運んだ。車のない前園家の移動手段はバスや電車などの公共交通機関であり、朝の九時に出発して、到着したのは正午を過ぎていた。道のりこそ大変だったものの、園内の散策とさらにはその道程までも終始笑顔であった。ペンギンの大群が頭上を泳いだ時

には二人揃って拍手を贈ったほどだ。満足の行く遠出になったのは広子だけでなく母もそうであったはずだ。

帰りの電車内にて、広子は母のジーンズを軽く握っていた。夏休みシーズンということもあり、車内はキャリーバッグを持った家族連れやテーマパーク帰りであろう若者達でごった返していた。広子が乗車しようと扉が開いた瞬間に激しい人の往来があり、それに巻き込まれて座席と向かい合う位置にまで流された。

その間は母と手を繋ぎ難を逃れていたが、乗客が各々つり革に手を掛けるか座席に座るかして安寧を取り戻したその時、広子はそっと拳の力を抜いた。母の手がいつもと別物のように思えたのだ。

一緒にいるから安心して

外から包む大きな掌はするように広子を元気付けていたはずだった。しかし今だけは、広子を手中に収めるための縄であるように感じた。八年間築き上げた関係性はひとたび風が吹けば飛んでいく、風化の激しい木の橋のような不安定なものであるのかもしれないと想像してしまった。固く結ばれていた手はすると下へ降りていき、ズボンの裾をさがりつくように握った。

急行の電車で路線の端から端まで移動し、乗り換えを挟んで再び路線を縦断する。広子の家の最寄り駅に近づくにつれて乗客の数が減る。一つ分の座席が空くと母は広子を座らせ、その前に陣取った。辺りに佇む人は大抵スマートフォンを片手に首を曲げているが、母は吊り革を持ち、暗くなった車窓を眺めていた。

広子の隣の男性が立ち上がり、扉へと歩いていった。母は周囲を見回して、そこに座った。車内は若者達が旅の思い出や次の旅の予定についてやかましく話している。若者の声に負けじと、静かに話していた他の乗客も声を張る。車内が携帯の着信音ですら掻き消されてしまうほどの賑やかさになると、母は広子の服をくいと引き寄せた。

「楽しかった？」

母は広子に尋ねた。いつもの笑顔に広子は「うん」と答えたが、先程の猜疑心が邪魔をして心からの返答はできなかった。ぎこちない、なぜやりに近かった。

「ペンギンさん凄かったね。ビューって飛んでたよ」

「てくてく歩いているのもかわいかった。皆で集まってあったかくしてて」

「そうだね。また来たい？」

「うん」

「喜んでもらえて良かった。頑張って電車乗ってきてよかったね。あとちょっとでお家だからもうひと踏ん張りだ」

終点から四つ手前の駅で、二人は降りた。ホームには屋根があり、いくつかの蛍光灯がぶら下がっている。柱にかかっている丸時計は八時を知らせている。

広子の住む町を母は田舎と呼称していた。のどかな田園風景が広がる、都市の喧騒に疲れ果てた人を癒す場所ではなく、ある程度は発展しているが家々の一角に畑が残っておりビルなどの高層住宅が見当たらない町だ。駅周辺には弁当屋やコンビニ、交番にロータリー等、人が経済活動を行うことができる施設が並んでいるが、只今のような夜になってしまえばそこかしこがシャッターで仕切られ、近頃の商店街のシャッター街を彷彿とさせる景観になる。東京の大都市に比べればどこも田舎と言ってしまうが、最も栄えているはずの場所が陰鬱としているここは田舎と呼ばれても仕方がない。

駅近郊は植木の足元から顔を出す小型の照明であったり、十メートルほどの間隔でコンクリートから生えている電灯によって何不自由ない視界が確保されていた。駅から歩いて一分もしない距離までしか適用されていないことに目を瞞れば申し分ない。

ホーム前だけ緑の塗料でコンクリートが塗り分けられていた。もちろんその辺りは光が届いているのだが、家へ帰るため奥へと進むと緑と黒の境目があった。留意すべきは色の境界だけでなく、明と暗の境界でもあることだ。一歩足を踏み入れれば更に奥の方にある曲がり角に設置されているカーブミラーの上部にしか照明は無い。

建て替えや外壁塗装などの工事が一切されておらず、昭和に建てられたものがそのまま残っている道である。夜の暗がり直に反映される一本道は、広子に恐怖を与えた。

「……」

「そうだなあ。近くにあるのだったら牛井かカツ井かな。両方井物だね。どっちがいい？」

家と逆方向ではあるが、牛井とカツ井チェーン店が近くにあった。深夜まで営業しており、仕事が長引き母の帰りが遅くなった日はチェーン店の弁当や井物をテイクアウトして家で食べることがままあった。

牛井でもカツ井でも大して差があるわけではない。値段も味も平均以上で広子の舌を唸らせるには申し分ない。二つに明確な好き嫌いがあれば母も察しがつくこともあるが、家での様子は同じとしか言いようがない。

このような二択を広子は最も嫌っていた。天秤にかけても少しも傾きが生まれな

い。どちらかを苦勞して選んだ後、言葉にしなければならない。

「……」

広子は沈黙を貫く。

「ねえ」

「……」

「ねえってば！」

母は声を裏返して怒鳴った。

「なんでずっと黙ってるの、どっちか決めれば良いだけでしょー」

頬を引き裂く勢いで口の開閉を繰り返していた。しつとりと馴染む母の声色は耳に入ると鼓膜をズタズタに傷つける凶器へとなっていた。広子は想像を絶する衝撃に驚いていたが、いつかやってくると予想していた予定調和であったとも思えていた。

「今日だけじゃないよね？ 昨日も、一昨日も、いつからなんて忘れた。悩んだのが馬鹿らしい。こっちはどうしたら答えてくれるか色んな人に相談して考えてたのに、ヒロちゃんも頑張ってくれなきゃ意味ないでしょ。どうしてこんな簡単なこともできないの!？」

「……え」

簡単。たった二文字、発音にして四音ぼっちの言葉に、広子は無性に腹が立った。何も考えず、ただ面倒だから決断を渋っていたわけではない。広子なりにどう転ぶか分からない後の事を心配してとった行動、もとい習慣だ。改善すべきであると理解していてもできない。この悩みは母には分からないのだろう。

「ちが……だって」

広子は口をつぐんだ。驚きに取って代わり、ふつふつと怒りが沸き上がってきた。このような事態にしたことは間違いないが広子であり、それが分からない子供ではない。しかし何年も苦樂を共にした母が広子という人柄を汲み取れていないことがひどく不快であった。

広子は母が遮る暗闇への道に向かって地面を強く蹴った。母には掴まることなく隣を駆け抜けた。因縁のライバルと共に走っているかのように奮い立つ。トップスピードに乗るにはそう時間はかからなかった。

「ヒロちゃん！」

背後からの声に意識を向けることなく、歯を噛み締めて走った。

広子は言いつけをよく守る子供だった。怒られたことは二度とせず、そもそも自身の行動が悪影響を及ぼさないかを考える癖があるために怒られることも少なかった。そうして規範内で生きてきた広子にとって、母親から逃亡し、事実上の家出の選択を取ったことは史上類を見ないイレギュラーだった。さらに広子が走っている道路は既に校区外であり、これも頑なに大人がいない時には避けてきた場所だ。同級生が帰り道に近道だからと言って通る危険地帯に、広子も足を踏み入れたのだ。普段なら罪悪感に苛まれ引き返すものだが、広子の頭の中は逆上 に等しい怒りで埋め尽くされていた。

無我夢中に走り、右へ左へ曲がる。途中民家に鎖で繋がれている犬に吠えられたが、恐怖と焦りでさらに足の回転が速くなった。いくら小学生の元気が有り余る時期とはいえ、半日歩き続けて慣れない電車移動をしたため広子の体はくたくただった。およそ一キロの距離を移動して、少しも足が動かなくなった広子は電柱に背中を預けた。

両肩を激しく上下させ、無理矢理にでも酸素を肺に取り入れようとする。夏の夜は十二分に暑く、多量の汗が広子から滴っていた。荒々しい呼吸は一向におさまらず、発汗の他に脚部の張りや淡い目眩が症状として現れていた。母から逃げるため自身の抱える難病から目をそむけるために全力を尽くしたのだ。その結果として感じたことのない疲労に襲われることになったのだが、それは広子にとっては些細なことだった。

未だ怒りに蝕まれる広子は、微かに働く頭で状況を把握しようとした。最後に見た時計は駅のホーム、八時半を示していた。母との一悶着があり、乳酸がたまるほど駆けてきたのだから九時を過ぎていても不思議ではない。周囲の家々は見たことのない並びである。近隣に住む人の名字は母に教わり読めるようになりつつあった中村、岡田、新井。それらのどの文字も表札には書かれていなかった。

空の方でバチリと音が鳴った。電柱に付いているライトに蛾が群がっており、羽同士がぶつかった音だ。広子は自由に操れない体に鞭を打ち、身を屈めて虫から間をあけた。生暖かい風が髪を撫でる。眼前を横切る不可視の空気の流れは、壁に当たり窓にあたり不気味な異音をかき鳴らす。視界の左端で影が動いた気がした。慌ててその方を見るが何もない。猫か鳥のどちらかでもないればどれだけ良かったことか。ありもしない存在に広子は体を震わせることしかできなかった。

「あ……」

声が出た。母の声でも、広子自身の恐怖に耐えきれなかった声でもない。しかしどこかで聞き覚えがある。あったかもしれない。その程度のものであった。

「魔法使いさん？」

声の正体は夕方に動物園で出会った広子が魔法使いと呼んだ女性だった。服装は違い、首にかかっていた名札は肩掛け鞆に姿を変えている。それでも彼女の見える困惑した表情と仕草は完全に一致していた。人の気配が感じられなかった未知の世界で、最も印象的な出会いを果たした女性との再会は、広子の不安が取り除かれるにふさわしい、相応の材料だった。

広子はその場で腰を下ろした。

「えっと……お母さんは？ はぐれちゃった？」

安心はできたが問いに答えることはしなかった。自分から言い出すのが恥ずかしかったというのもあるが、家出だとバレれば母の元に連れていかれこっぴどく叱ら

れるのではないかという懸念が広子に発言をとどまらせた。

「違うのかな。あの動物園にいた子だよね。お母さんと一緒だったはずだけど」

「……」

「もしかしてけど……家出とか？」

広子の表情にあからさまに驚きが現れた。目蓋を極限まで開き、口も僅かながら開いていた。熟語で表すのなら図星であり、思わず広子は両手で口を覆った。今、母と引き合わされるのが最も困るからだ。

「……あつてた。喧嘩しちゃったの？ なんてとかは聞いて良いのかな」

「……」

「ダメなんだ。まあいいや、とりあえず交番行こう。今いるのかな。ああいうのは困ってる時に限っていないんだけど。さ、行くよ、ほら」

女性は広子に手を差し出した。直感でこの手を取ると母に見つかってしまうと理解した。広子は誘いをはねのけ、一時は心の拠り所であった電柱に再び身を預けた。「帰りたくないの？」

無言を貫き通すつもりだった。そうしたら会話の主導権を相手に譲ることができから。これまでそうしていくつも場面を乗り越えてきた。悪癖であると頭では了解していても、決して変えることはできないであろう。しかし、今この時だけは違った。広子は首を縦に振った。

「……そっ……かあ。ちょっと待ってね」

女性はスマホを紺色のジーンズのポケットから取り出した。そして頬を指で三回掻いた。ふう、と深呼吸をした後、女性は口を開いた。

「よかったらなんだけど……ウチ来る？」

「えっ」

「私以外に誰もいないし、布団もあるからちゃんと寝れると思うけど。どうかな？」願ってもない提案だ。母のもとに帰らなくていいとなればこれまでの心配事が綺麗さっぱりなくなる。そして承諾をする際もさつきと同じことをすればいい。何も言わずとも首を縦に振るだけで伝わる。

それができたら苦労しない。だから母と喧嘩し、家出までしたのだ。広子は一度は和らいだ表情や手足の筋肉を硬直させた。軽い動悸もあった。頭までも活動を制限し、相手のアクションをひたすらに待つ体勢へと移行した。広子ながらの逃避の一手だった。

女性は唸り声を上げると、パンと手を叩いた。寂しい夜の街にクラブ音が反響する。

「よし決めた。行くよ」

女性は広子の手を掴み、てこでも動かなかった体をくいと引いた。魔法でもかけ

られたのかのように自然とつられて女性と同じ方向へ足が進んだ。女性の背中中は母と似ていたがどこか違う。少し高い身長のせいなのか、固有の雰囲気などという曖昧な指標によるものか広子には断定ができない。その差異を認識することが何を意味するのかすら理解に及ばなかった。

「そうだ、名前教えてほしいな」

女性が振り向き言った。一軒家の庭に生えて、道路に突き出している大きな木が電灯の光を遮り、目元に影をつくって隠している。

「前園広子」

「広子ちゃんか。よろしくね」

道中、読みの分からない名前の幼稚園や巨大なパイプを至るところに突き出すバイク、車が何台も停まっている駐車場など、広子の住む校区内では中々お目にかかれない場所や物が多くあった。知らない世界が外にはあるのだと、広子はまじまじと実感した。

広子が羽を休めていた電柱から、女性の住むアパートまでは五分も経たずに到着した。最初の一步を踏み出した後、広子は女性と繋がっていた手をすぐに離した。どういいうわけか憧れの女性の手を受け付けられなかったが、母とのそれとおよそ等しい安心感は得られた。

アパートは二階建てであり、中央に上下を結ぶ階段が付いている。扉が両側にありその奥に部屋がある。一階につき二部屋、二階も同じ構造であるため合わせて四部屋だ。外壁は茶色でレンガ模様が刻まれている。屋根の黒であったり、建物は緑の低木に囲まれてあったりで多彩な色が見受けられた。色が豊かであっても一棟だとかなりこじんまりとしているが、アパートは道に沿って何棟も奥に続いており威圧感すら感じられた。

女性はその中の一つに向かい、階段を上った。二つの階は途中にあるキャンプ用のランプに似ている暖色系の光で照らされている。女性は鞆から鍵を掏い上げ、白で縁取りされた黒色のドアを開ける。

広子はその一挙手一投足を固唾を飲んで見守った。自身が崇拝する女性が住む家とはどのようなものであろうか。広子は様々な動物のぬいぐるみで足の踏み場がない部屋を想像した。見渡す限りがかわいいで占領されていて、お伽噺に出てくるようなメルヘンな部屋だ。

しかしドアの隙間から広がった景色はそれとは正反対だった。白い壁紙に反射光で輝くフローリング、窓際に畳まれている敷き布団と広子の腰よりも拳一つ分高いくらいの机、ペランダに繋がる窓に汚れた食器のない清潔なキッチンとそれに付属する小さな冷蔵庫。それ以外には何も無い。俗に言うミニマリストのそれだった。え、と広子は声に出しそうになった。魔法使いなのだから沢山の品々に囲まれて

生活しているのではないのか。動物園の売店の姿を知った後には信じられない光景だった。

「これといって触ったらダメなものとかはないか。広子ちゃんの家よりも狭いかもしれないけどゆっくりしていいよ」

そう言う女性と女性は鞆を部屋の角に起き、ささやかながらのインテリアにした。それから鞆の中を覗いて何かを探している様子だった。広子は部屋全体を確認する。雑貨などは無く前述した通りだったが、一つ広子の目を引いたものがあった。リビングキッチンの右手の引戸だった。女性はまだ鞆を漁っている。

広子は最後の希望を込めて扉を横へスライドした。そこにはすりガラスの別の扉と洗濯機があるだけだった。風呂場であることは広子の目にも明らかであった。当然ぬいぐるみはない。

「あ、そうだ」

後ろで女性の声があった。いつの間にか鞆から離れていた。

「お風呂入ってないのか。一杯走ったみたいだし、汗かいたでしょ。ご飯の前に行ってきていいよ」

「……ありがとう」

「ううん。ご飯の用意しとくね」

女性に促されるまま更衣室に入り引戸を閉じた。汗がベタつき着脱すら億劫な半袖を綺麗な正方形に畳んで洗濯機のそばに置く。ズボンは一つにしてその上に、下着は間に挟んで外からは分からないようにした。

気圧差のせいかすりガラスの扉は重く簡単には開かない。体重をかけて思い切り力を込めると大きな音と共に風呂場に入ることができた。前方には金属製のシャワーがあり、黄金色の容器のシャンプー、リンス、コンディショナーが床に並んでいる。右手には一人用の浴槽。特別なものは散見されなかった。

広子は蛇口をひねり水を出した。最初は冷たく、苦悶の表情を浮かべた後シャワーヘッドを壁に向けて温かくなるまで待機した。温度が上がってきたのを感じると体を水にさらし、手で肌を擦り汚れを落としていった。次に長く伸びた髪を濡らしつつシャンプーを手で馴染ませる。十分水をかぶった所で泡立つ両手を頭頂部に運んだ。灰かに匂う花の香りは女性から漂うものと同一だった。

髪を泡で包む間、広子はこれからのことを考えた。必死に思考の奥底に沈めてきた議題だ。

きっと彼女との生活は長くは続かない。何日も共にできるはずがない。彼女の方が広子を追い出すだろう。母も心配している。これまでに類を見ない喧嘩こそしたが、それでも唯一の親なのだ。いずれ対面する時が来る。どちらの働きかけかは分からないものの確実だろう。

光景を想像する。夜の九時、近所への迷惑など関係なかった大喧嘩の舞台。真っ直ぐに伸びる道の両端から、離れるために使った全速力を今度は近づくために用いる。みるみるうちに距離は縮まり、抱き合い、母の顔をじっと見つめる。今の心境では考えられない情景であるが、確かに訪れる。この時どのような言葉を使うべきか熟考するべきだった。

互いに意地を捨て、悪かったと言い、またいつものように手を繋いで帰ることができる。変わらない日常が戻ってくる。

それ以外ない。そう確信した所であらかた体を洗い終えた。できる限り音を立てないようにすりガラスの扉を開き、バスマットの上にいるの間に用意されていたバスタオルで全身を拭く。さっきまで着ていた服に手を伸ばすも、自分の汗で浸されていることへのためらいにより動きを止めた。

広子は足の裏を念入りに拭いてバスマットがある領域から出た。そして引戸から顔の片側が見えるくらいの隙間を開けた。左目で辺りを探ると、女性がそばを横切った。広子は少し後退し、何もなかったかのように更衣室で暇を潰しているふりを始めた。

「ちゃんと入れた？」

隙間からその姿は見えないが、声の響きからして扉を挟んだすぐ向こうにいると分かった。

「……うん」

「よかった。あの、ごめんね。服が大きいのがなくてダボダボなのになるんだ。それと下着も合うのなくて、頑張って私のを履くか広子ちゃんの履いてたやつをもう一回使うかになるんだけどどっちが良い？」

「えっ……と」

広子は頭をひねった。質問に答えるためだ。気持ちとしては自分のを履くで良かった。サイズもふた回りは大きいはずであり、なにより相手は今日会ったばかりだ。家出をする勇氣はあれど、人の衣服を借りる勇氣はなかった。汗で汚れている物を肌につけることはできれば避けたいが、それとこれでは数段以上の差がある。

考えはまとまった。後は口に出すだけ。

「あの、えっと。わたし……は」

自分ので大丈夫と言え。言うだけで怒られることも呆れられることもない。分かっているはずだ。

「……だから、だから……」

なのに言えない。文字は既に組み立てられている。しかし声を発するという動作がたまらなく苦痛だった。早く言わなければ。焦りがみるみる内につのつていき、体が震えてきた。呼吸は浅く、気がつけば女性は扉をさらに数センチ開けていた。

その憐れなものを見つめるような視線が広子の焦りを増幅させた。

「大丈夫？」

女性の心配をよそに、広子は思考を続けた。耳から上がガンガンと脈打つのがはっきり分かる。こめかみの辺りがひどく震えた。考えているというよりそれを盾にして黙りこくっているだけだった。

広子は気が付いた。明らかに症状が悪化している。母のアイスクリームを食べるか聞かれた時にはこうはならなかった。女性に家に来るか提案された時点では既に酷く体調が悪くなっていたように思える。転機はどこか、探すのすぐに見つかった。母に怒鳴られてからだ。広子は母の配慮のなさに怒りをあらわにしたが、それと同時に計り知れない恐怖を植え付けられていた。二度と経験してはならないトラウマへと昇華していたのだ。

広子の動悸は苛烈を増した。再び広子の癖が原因で怒らせてはならないと逸る気持ちと、些細な決断すらも憚らせる思考の奥底で蝕む悪魔、その二つが終着のない戦いを続けていた。

永遠に思われた刻の最中、女性は広子の頭に手を置いた。所在の判明しなかった意識は瞬く間に連れ戻された。荒い息遣いはそのままに、上下運動だけが塞き止められている。何が起こったのか広子には理解ができなかった。

「一回落ち着いて」

広子はハッと息を飲んだ。また怒られるのではないかと想像したからだ。

「私には広子ちゃんが何に悩まされてるのか分からない。けど焦って必死に何かをしようとしているのは痛い程理解できる。頑張ろうとしなくて良い、時間ならたっぷりあるんだから」

結果は異なった。その言葉を聞いた時、広子はどこか救われたように感じた。一番身近な母に分かって貰えなかったのだから、誰にも共感して貰えない感情だと思いついていた。だからこそ彼女の金言は神様からの声と等しかった。魔法使いは人の気持ちを和らげることができるらしい。

「そうだな。履かないっていうのはまずいから、悪いけど自分ので良い？」

「……うん」

「分かった。服持ってくるからちょっと待ってて」

広子は女性の用意した白の「シャツを着て、お気に入りのピンクの下着と膝の上が見えるくらいのデニムのショートパンツを履いた。」シャツは宣告通りのサイズで、ズボンの裾が顔を覗かせる程度だった。洗面台の鏡を使って確認しようとするも艶のあるつむじが見えるだけだ。

更衣室から出ると女性が鞆を持って大きな窓の前に立っていた。どこか悲壮感のある佇まいが広子には既視感があった。遠くの方を見つめる目、その意味が分かる

日が来るのだろうか。想像もつかなかった。

「あの」

広子が声をかけると女性は我に返ったように振り向いた。そして朗らかな笑顔を見せた。

「な、なに？ あ、高校の頃に買ったやつだから一番小さいと思ったけどやっぱりぶかぶかだね。でも似合ってるよ」

「ありがとう……。お風呂気持ち良かった」

「なら問題ないね。それと重ね重ね悪いんだけどウチにまともなご飯なくてさ、とかつになるけど外食でいい？」

カツと聞くと母を思い出してしまうが、空腹ではあったため背に腹は代えられなかった。加えて女性が提案してくれたことを無下にしたくなかった。自分で決めなくてよい状況を逃す手もない。

「うん、食べたい」

広子はたどたどしく答えた。

女性は再び微笑むと玄関へと歩いた。それに連れられる形で広子は後を追う。部屋の電気が消え、ブラックボックスに変わった。女性は鍵を閉めると階段を下り、アパートへの道を逆行した。そして行きに通りすぎた駐車場に入った。白い線で作られた箱にみっちり詰まっている車の中から、灰色の軽自動車の前で足を止めた。女性が運転席の取っ手にある黒のボタンを押すとピッと軽快な音と鍵が開く音が共に聞こえた。

「乗って。遠いから歩きだと時間かかるんだ。駐車場がある店だからこっちの方が楽なんだよね」

「車持ってるんだ」

広子は車が無い家に生まれ、ゆえにそれが普通だと思っていた。もちろん乗ったこともないため、乗ってと言われてもどのようにするか勝手が分からない。

「ん？ ああ、職場——動物園へは電車が早くてね。車はこういう時にしか使わないんだ。いらなくて言ったんだけどね。ママのお古貰っちゃった。無いよりはかは便利なのは確かなんだけど手入れとか面倒で……」

「えっと」

「あ、ごめん。らしくないな、こんなに勢いよく喋るなんて。さ、どうぞ」

女性は助手席のドアを開けた。広子は恐る恐る座席に腰を下ろすと、椅子の弾力で体が少し沈んだ。高級感のある椅子が映画館のそれを彷彿とさせるが、背中はシートにつけなかった。

女性が隣に座ると足元でごちゃごちゃ操作をした。何をしているのか広子が興味津々で見つめていると、遊園地のアトラクションが動き出す瞬間のような効果音が

車内に満ちた。メーターパネルが駆動音と共にオレンジに光り輝く。それに隣接するエアレジスターから生暖かい風が吹き出し、だんだんと心地よい温度に下がっていった。風に乗って優雅な花の香りが周囲に溢れた。

女性が、広子と女性の間にあるレバーを引いた。

「じゃあ出発するね。初心者だから広子ちゃんのパパとかママに比べたらごちないかもしれないけど、事故はしないから安心して」

車に乗ったことがないため比較対象がいなかった。けれどもテレビでの事故映像は何度も見たことがあった。高齢者による事故が多い昨今だが、初心者ドライバーによるものも広子の記憶に新しくあった。

「ホントに？」

「えー……うん、任せて」

なら大丈夫かと、広子は納得した。女性の言葉は不思議だった。必ずそうなるという絶対的な予感がするからだ。まるで言葉そのものに魔法がかけられているような感覚だった。

車が前に進み、広子の体が強制的に背中につけられる。小さく声を出してしまい、同時に甲高い機械音が車内に轟いた。

「あっ、シートベルト忘れてた。広子ちゃんもしてね」

「これ？」

広子がレバーの横にある小さい箱を指差すと、女性は左上にある金属を引っ張ってそこに刺すよう伝えた。正方形の穴が空いている凸の形状をした金具を手を持ち、右へと力をいれると少し延びたところでロックがかかりそれ以上出てこなくなった。

「一回戻して、ゆっくり引っ張ってみて。したらできるはず」

その通りしてみるとどんな方向に動かすもびくともしなかったシートベルトがするすると延びていった。

「もしかして広子ちゃん車乗ったことない？」

「うん。お出かけは全部電車」

「そうだったんだ。それなら悪いことをしちゃったな。なら始めての車、はりきって運転するね」

女性は深呼吸をしてからハンドルを握った。何回かの切り返しの後駐車場から出た。車からは光が常に発されており、暗く不安だった夜道が真昼のような明度になっている。女性の運転は安全第一であり、車道が狭ければ速度を落とし、対向車が現れれば最大限脇に逸れて相手の通過を待った。広子はその様子を嬉々として見ていた。車窓から見える景色は電車のような俯瞰しているダイナミックな変化を持ち合わせていないが、地に足をつけて隣にあった建物に次の瞬間には後方へ流れていく疾走感が飽きなかった。

時間はあっという間に流れていき、五分が経った頃、女性は右へウインカーを出し、コンクリートブロックが四方に積まれた駐車場に入っていく。出発時とは異なりスムーズだったが、今度は白線の内側に綺麗に止めることに苦戦していた。無事に駐車すると女性はハンドルに項垂れた。そして大きなクラクションが鳴り跳び上がる。その様子を見た広子は少し笑った。

「まだやってるか聞いてくる。ちょっと待ってて」

そう言う女性には車から下り、駐車場を右に曲がって走っていった。オレンジの文字が示す現在時刻は九時半ちょうど。普段ならそろそろ布団に入る時間だ。動物のぬいぐるみ一つを選び、同じ枕で寝る。母とは別々の布団で、大人になるための練習のことだった。始めての車移動で興奮気味の広子だがいつ眠くなってもおかしくない。改めて上体を前に起こした。

少しして女性が小走りで帰ってきた。三分ほどだ。

「空いてた。お客さん誰もいなくて暇してたよ。早く行ってあげよう」

店は駐車場のすぐ側にあった。「猩々亭」という店名であり、のれんの奥には木製の格子状の扉がある。女性が失礼しますと伸ばし気味に言っていると広子は後をついていった。

店内は三つのテーブルとカウンター席、その向かいにある調理場で構成されていた。家具は白木が使われており、暖色の灯りが上部から降り注いでいる。ペーじュ色の壁紙には赤い猿のような獣の描かれた掛け軸が四幅ある。それぞれ瓢箪や扇子を持ち舞いを踊っている。店内には曲が流れていないが油が跳ねる音が小耳よく聞こえた。

「お、あんた言ってたんはその穠ちゃんやな。良い面してるじゃねえの」

カウンターの奥、調理場からの声だった。顔のシワが目立つ恰幅の良い男性で、白の調理はつびを着て切れ味の良さそうな鈍色の包丁を片手に持っている。

「ちょ……小村さん」

「ああ悪い！ つい癖が……見ての通り誰もおらんねん。どこでもいいから席つき」包丁を前に突き出して店内のテーブルとカウンターへ向けて空中で円を描いた。口調と言い態度と言い、広子は店の男性、小村に苦手意識を持った。女性の後ろに隠れて粗相をしなければ無事に済むであろうが、少しでも逆鱗に触れてしまえば何をされるか分かったものではない。店内の興味深い品々を見てみようと女性より前に出ていたため広子は小村の視線を女性が遮る位置に立った。

「包丁しまつて下さいよ。広子ちゃん萎縮してるじゃないですか。普通に危ないし」「子供相手ってなんや難しいな。やったあかんこと多そうや」

小村は包丁をまな板に置いた。女性は広子の腕を掴み扉に最も近いテーブル席に腰かける。少しして女性は横目

で小村の動向を確認しながら手のひらを口元に当てた。

「ごめんね。店長優しいんだけど今日は張り切ってるみたい」

油の音に隠れるような小さい声で女性は話した。机に体重を預け、壁際の広子に目一杯近づいての密談だった。

「俺のことなんか話してんの？」

「耳いいんだっけ」

野菜が小耳よく切られる音と衣の弾ける音が聞こえた後、小村が黒色の皿を両手に持ちやってきた。みずみずしい千切りのキャベツの極上の布団、それに寝そべる黄金色の衣に身を包んだ豚ロース。片隅には一欠片のレモンがある。湯気が天井へと溶け、広子と女性の肌を湿らせた。

「……わあ、美味しそう」

広子は思わず声を漏らした。隙間から見える肉は香ばしい肉汁を流し、光が煌びやかに反射している。広子の母の作るとんかつは米が何杯も進むほどの味であるが、それを遥かに凌駕する予感がした。

「ほら、とんかつや。早よ食って出てってな」

「はいはい。広子ちゃん、いただきますしよ」

広子は体の前で両手を合わせて、女性の後にいただきますと復唱した。女性が端の脂部分をかじると、広子は続いて同じ部位を食べた。目視では油が多いと予想していたが、口の中に入れると存外そうでなかった。あっさりとした食感の奥に肉本来の味と塩コショウが見え隠れする。衣にも味がついていないかと錯覚するほど濃厚で、さっぱりとした不思議な感覚だった。水で濡らされているキャベツと共に食べると甘味が加わり、より深みのある味わいになった。

広子は空っぽの胃袋にこれでもかと肉と野菜を詰め込んでいった。旨いとは思っても何がどう旨いかは言語化できない、小村に称賛の言葉を贈ることはできない。しかし広子の行動が確かな味の証明であった。

皿の上に食材がなくなるまで時間はかからなかった。無我夢中に箸を動かす内に吸い込まれるように腹へと消えていった。広子はふと女性の方を見た。ゆっくりな動作で肉を口に運び、大切に噛み締める。広子と違い一口を味わって食べているようだった。

女性の皿には肉が二切れ残っていた。途中表情を曇らせると、箸を置いて水を飲むことが何度かあった。

「ごめんね。私食べるの遅くって。もうちょっとだから待ってて」

「お腹いっぱいなの」と聞いてみようか。苦しそうな女性を見て広子は考えたが、自分の分を食べてなお欲しがいいやいやつと思われてもかなわないため、控えることにした。店主の顔をチラリと見たが遅いと叱咤することはなく、調理場の奥で

腕を組んで掛け軸を眺めていた。食事中には干渉しない人物のようだった。

女性が食べ終わったのは広子の箸が皿に置かれた五分後だった。グラスに注いだ水をちまちま飲み女性を待っていた。

「ごめんお待たせ、行こうか。小村さんお会計」

女性が調理場の方を見ると小村は手で追い払うようなジェスチャーをした。でも、と女性が言いよどむと小村は舌打ちをした。

「……ごちそうさまでした」

広子は状況が理解できなかった。何度か狸々亭に似た店に母と訪れたことがあった。漏れなく頬が落ちるほどの味を提供するが、その対価として見合った金額を払わなければならぬ。当たり前だった。しかし今回それが行われなかった。普通が当てはまらないシチュエーション、動物園で女性を見かけた時に似た衝撃だった。狸々亭ののれんをくぐると広子は女性に疑問をぶつけた。

「なんでお金払わなかったの？ タダなの？」

「え、急にどうしたの。……うーん、難しいんだけど」

「魔法……とか？」

「ああ、そう、そうなの。魔法でちょちょいって」

「そうなんだ……やっぱり……すごい魔法使いさんは」

「でしょ、どんなもんだい」

車に乗ると女性はすぐにエンジンをかけて店の駐車場を出た。時計は九時五十分を表示している。側に建つ家が後ろへ流れていき、行きと同じ道を逆走する。広子は目をこすり、あくびをした。扉に体を預けて一度目蓋を閉じた。

潮崎は社会人二年目、県外の動物園内にあるグッズショップに勤めている。文系の学部を出た潮崎は同学年同学部の仲間と比べて異色とも言える職に就いた。本命が特にあったわけでもなく、何となくで選んだ。

潮崎には日々ストレスとなる障壁があった。潮崎は仕事ができない人間だった。上司に指定された業務もこなせなければ、何度もミスをした作業であつてもままたらない。過去の失敗や教訓などを一向にものにできない。

仕事に興味関心がなく、金さえ貰えればミス続きでもさぼりがあつてもどうでもいい、という考え方を持っていればよかったことか。潮崎自身は改善しようとして奮闘していた。必死にメモを取り、会社に貢献できるようにしたいと人一倍

努力している自信すらもあつた。けれどもその頑張りの結果として返ってくることはなく、レジは打ち間違え、発注も誤り、客への対応は無愛想なままであつた。

さらに厄介なことに、職場の仲間は潮崎を叱責することはなかった。「いつも頑張ってるのは知ってるから」、などと潮崎のミスを擁護する言葉ばかりかけられる。その優しさが潮崎の心を日々蝕んだ。優しすぎるのだ。せめて怒ってくれ、ミスをしたのだから何らかのペナルティを与えてくれ。いくら思えど潮崎は咎められない。こうなってくると別の疑念が思考を支配する。同僚は潮崎と接する際、笑って楽しそうにしている。果たしてそれは裏でもそうなのだろうか。他の同僚と話す時には態度が違い、己の悪口を嬉々として喋っているのではないか。些細な違和感から始まった過度な妄想は、日に増していった。

今日は特に酷かった。休日に多く入るアルバイトの学生に注意を受けたからだ。品出しの過程、棚卸しが近いということを忘れ、個数を既に数えていた商品を倉庫から移動してしまった。担当していた学生の迷惑そうな表情が、いつまで経っても潮崎の脳内にこびりついて離れようとしないう。体全体に重りを乗せられたような不自由さを一日中抱えながら業務を行っていた。

仕事を終えた潮崎は近場のスーパーマーケットで夕食の買い出しに行った。一通りの食材はアパートの冷蔵庫にあるが今日は自炊する気になれなかった。適当な惣菜を買って、食って、その辺りの床で寝てしまいたかったのだ。焼きそばとお好み焼きのセット、この店の定番と言える組み合わせだった。やる気の起きない日にはお世話になる潮崎の味方だ。

それに手を伸ばしたその時、潮崎は行くところまで来てしまった。私なんかこれで食べて良いのか、買う金は全て迷惑をかけたにもかかわらず振り込まれた金だ。使って良いのか。極度の被害妄想はついに日常生活にも侵食を始めた。バカらしい葛藤ではあつたが、健康体の潮崎に自然に動悸が現れるほど思い詰めていた。

寸前まで開いていた腕を咄嗟に胸へ戻した。潮崎は踵を返して帰路に着いた。満員の電車内で今日しでかしたミスを並べる。大小様々で、上は棚卸しの邪魔から下は客へのちょっとした伝達事項の不十分という、些細なあまり客にはおろか、他の仲間にもまず知られないであろうことにまで反省会は及んだ。そして大きなため息をもらす。

人気のない駅で降りた潮崎はアパートまでの二十分の徒歩の間、足元を見つめ、立場がどうやら、明日が怖いやらと再びろくでもない事に思考を巡らせていた。潮崎が最も欲しているのは逃避だった。仕事や人間関係を綺麗さっぱり忘れ去れるような出来事を強く願っていた。甘い菓子や塩気の多い食事、金を浪費するギャンブルやマスターベーションなどの一瞬の逃避では足りない。継続した永遠と続くような出来事。早々あり得ない条件であるとは重々承知の上であつたが、それでもしな

ければ自分の感情に殺されてしまう。

深く発されるため息と鳴り続ける心拍、重怠い足取りが不和を起こし、それぞれの波が交差する度に頭に鈍器が叩きつけられたような感覚を覚えた。暗く先の見え辛い田舎の一般道が潮崎の人生と重なるようで、足を前に進めることが酷く苦しく思える。

思考と相反して、潮崎は自宅まであと十分の所までやってきた。この辺りは半年前までは小規模の畑が連立していた。ろくでもない日々を過ごす内にさら地にされ、住宅がいくつも建てられていた。売家の看板が立っており、買い手は見つかっていないようだった。光る窓はどこにも見当たらず、近辺を照らすのは電柱から垂れているライト一つだけだった。

潮崎は黒のコンクリートを見つめながら歩いていると、電柱の方からバチリと音が鳴った。見れば虫同士が接触したらしく、ライトに蛾や羽虫が無数に群がっていた。電柱を避けて歩くべく無人の家に近づくと、その電柱の根元で何かが動いた。犬か猫か、どちらにせよ近づくべきではないと潮崎はそこに目をやった。

「あ……」

「魔法使いさん？」

やけに印象的な出会いだったためか見覚えがあった。

夕方の閉店時刻三十分前といった頃、ミスをしたと気がついたすぐ後のことだった。傷心しつつも仕事に戻った潮崎は、蛙のブレスレットの数が店頭に残り僅かであることに気がついた。倉庫に行き、数多とあるグッズの中から目的の物を探し当てて両手一杯に抱えて出た。

この少女は最後のブレスレットの前で佇んでいた。親にでもねだるのだろうか。荷物を持ちながら考えていると、少女と目が合った。そして同じことを言われたのだ。

「えっと……お母さんは？ はぐれちゃった？」

まさかと潮崎は思ったが少女はこくりとうなずく。家出かと尋ねるとそれにも同様の反応を示した。少女は呼吸を荒くしており、潮崎との応対の間にだんだんと落ち着きを取り戻していった。全速力で走ったのだろう、多量の汗が全身から流れている。

「喧嘩しちゃったの？ なんかとかは聞いて良いのかな」

少女は何も答えない。答えたくないのは一目瞭然だった。うつむき、ばつの悪そうに指を絡めている。

潮崎の中で黒く禍々しいものが蠢めいた。決して考えてはならない、思い付くことすら憚られる、ある種のひらめきだった。必要のない考えだと必死に脳から排除しようと試みるも時すでに遅く、逃れようのない誘惑へとおぞましく姿を変えてい

た。

「とりあえず交番行こう」

内なる悪魔に対して、潮崎の最後の抵抗だった。しかし結果は失敗に終わった。潮崎は少女には言わずに警察へ電話をかけようとした。スマホの電源を入れて電話アプリを開く。ぎこちない手つきで番号を打ち込んだ。発信ボタンを押そうとした瞬間、定まった形を持っていなかった誘惑が言葉という外格を得てしまった。

誘拐をしよう

どうせ仕事に行っても迷惑をかける。たとえミスをしなかりうが仲間には良い顔はされないだろう。それならば道を外れてしまった方が楽ではないのか。いずれ捕まるとしても逃避の日々は続くはずだ。

潮崎は少女の手を引き自宅へと歩いた。

潮崎には二つの習慣があった。習慣というには不定期で、何十回と行ったわけではない。人生において決断に迫られた時にだけ行う。以前は潮崎が当時付き合っていた彼氏に別れを切り出す前だった。それらを行う場合、大抵はどの選択肢を取るか決まっている。本当に良いのかという不安を解消し、最後に背中を押してもらうためだった。

一つ目はとんかつ屋で腹がはちぎれるまで食べることだ。高校受験の合格祈願で実家近くのとんかつ屋で食事をしたことが始まりだった。ただの言葉遊びとゲン担ぎではあったが、潮崎にはこれ以上ないエールになり、見事第一志望に合格することができた。

社会人入りと同時に現在家に引っ越し、夕食を自分で用意するようになったため、自炊が面倒な日には狸々亭に足を運ぶことが多くなった。おのずと特別感は薄くなつたが今回のような日には必ず赴き、決断に向けてのエネルギーを補充する。

狸々亭は十時まで営業しているが、夏休みなどの長期休みシーズンになると臨時休業日として営業しないことが度々ある。

潮崎は駐車場に車を停めると店子連れずに店を訪ねた。格子状の扉からは生活を感じさせる光は見えない。案の定、臨時休業の貼り紙が扉にあった。やっぱりかと潮崎は声をもらした。営業しているなら親戚を預かっているなどと言えば違和感なく入店できただろうが、こうなったら正直に話さなければならぬだろう。

引戸のすぐそばには木の箱が設置されている。箱の前面にあるつまみを動かなくなるまで回すと開く仕組みだ。中にはインターホンだけがポツンとあった。潮崎は息を整えてボタンを押した。時間のかからない内に店の中からは物が転げ落ちるような音が聞こえた。

「はい。ちょっと待ってな」

声と共に鍵の開く音がした。店主の小村だった。

「ご無沙汰してます」

「おお、潮崎の姉ちゃん。悪いなあ、今日は店閉めてんねん」

小村はシワの目立つタンクトップとダボついた黒のショートパンツを着用していた。寝癖も酷く、悠々自適な休暇を過ごしていたことは確かめるまでもない。

狸々亭は知る人ぞ知る隠れ家的な名店だ。潮崎がとんかつを食べに来ると客は一人か二人いれば良い方、潮崎と小村の一对一であることも珍しくなかった。初めの内は注文する時以外喋ることはめったになかったが、かなりの頻度で来店している間により友人のような関係になった。インターホンの在処も、長期休暇中の臨時休業がただのサボリであることも常連にしか教えないのだという。

潮崎は俯きそうになる重い頭を必死に持ち上げ、小村の瞳を見つめた。

「……とんかつを二枚作ってくれませんか」

「なんかあったんやな。立ち話もあれやし、とりあえず中入りや」

小村に連れられ油の匂いが全く漂ってこない店内に入った。

悩み事を小村に話すのは初めてではなかった。客が潮崎一人の時に、小村は暇だと言って適当な席に座る。そして互いの日常生活の不満や悩み、腹を抱えて笑ったことなどを伝え合う。その中で職場での感情を吐露することもあったため大方の説明はせずに済んだ。ただ限界が来たことと、家出をした少女を自宅に招いたことを話すだけで、小村はあきれた様子で目元に手を当てた。深くため息をついて小村は口を開いた。

「誘拐やん。お前捕まるやろ、神経が理解できんわ」

「承知の上です」

「やろうな、顔が物語ってるわ。ほんで誘拐がバレたらあかんから黙って飯出してくれそうなウチ頼ったんか？」

「いえ、逃亡生活への覚悟を決めるためです。私の習慣なので」

「習慣で、ろくでもないことするんやろ。ウチをそんな目的のために使ってほしないわ。あんたには期待しとったんやけどな。いつも頑張ってるし」

「みんな言いますよ。それが信用できないって知ってますよね」

「嘘ついたらんのやけどな」

小村は調理場へ行き、食器棚から透明なグラスを二つ取り出した。冷蔵庫に入っていたペットボトルから水を注いで潮崎に手渡した。小村は一息にグラスの水を飲み干した。

「あんたの言うてることも分かる。ずっと聞いてきたからな。ただそれとこれは話が別や。犯罪はあかん。まだ若いんやから経歴に傷ついたら後が大変やろ」

「後を考えて行動してません」

潮崎は小村を見つめた。

「……分かった。飯は作った。ただし、仮にしょっぱかれてもこの名前出すなよ。それが条件や」

「分かりました。ありがとうございます」

「許してはならないからな。諦めただけや。警察行ったらまだ間に合うやろ、おすすめするわ」

小村は少女を連れてこいと言い調理場に戻った。軽く肩のストレッチをして気合を入れて入っているようだった。

「いつものでええか。米は炊けんが肉の用意ならしてある」

「それで」

運転を開始してまもなく、少女はすっかり眠りについた。車に乗ってから呂律があまり回っていないようだったため、眠気が限界だったのだろう。潮崎も同じく倒れるように眠りにつくことがあったが、気がついたら朝になって自分が夜を越した自覚がないことが常だった。健やかな顔でシートに沈む彼女の顔を確認した後、誰も聞かれない車内で口を開いた。

「はあ……これからどうするかな」

駐車場に到着し十分が経った。エアコンの効いた車内で、潮崎はハンドルにもたれていた。これからどうするか、その答えが未だ出ていなかったのだ。狸々亭を訪れる前は、広子を家に招き入れて誘拐をはかるつもりだったが、ここに来て誤算が生まれた。同じアパートの住人に広子を見られてしまった。子供が失踪したとなれば顔写真が出回るだろう。過去の失踪事件とは異なり、インターネットが発達している現代なら、顔を見られるのは重大なミスだ。行き当たりばったりでありにもずさんな計画が、ここに来て尾を引いた。考えれば考えるほど一筋縄ではない。

幸運なことに、潮崎は車を持っている。誰にも姿を見られないまま移動することは可能だ。適当な田舎まで車を走らせて、流れでボロい部屋を借りる。手続き等懸念事項はあるが、最も現実的だろうか。

その辺りの知識がない潮崎はスマホを片手に持って指を動かしていた。東北、中部の一部地域、中国、四国地方。九州まで行くのはかなり疲れるが候補ではあった。即入居可、家賃四万程度、住人同士の関係が希薄だと好ましい。難しい条件だが該当するのが何カ所があった。潮崎は当面の目標を日本北上に決めた。

誘拐と一緒に住むことを前提として潮崎は部屋探しや計画を練っていたが、実のところ、一週間持てば良い方だとも考えていた。広子は母との喧嘩で腹を立てて

いる。その程度の怒りは短期的で、すぐに冷めるだろう。明日の朝には母の元へ帰りたいと言いついてもおかしくない。魔法使いだと呼ばれるのもあれで最後だ。

広子の言う魔法使いの意味が潮崎には理解できていなかった。蛙を出した、倉庫から持ってきただけだ。金を払わなかった、小村からのサービスだ。どちらも特別なことはしていない。

部屋探しの過程で潮崎は誘拐の範囲についても調べた。検索にかかった記事によると、一日だけでも誘拐になるという。拾って警察に届けなければ犯罪になる。小村の言う通り、引き返すなら今だった。二つの選択肢があった。一つは先ほどの即興の計画を実行する。そしてもう一つは警察に広子を渡しに行くことだ。後者の際に正直に話すか嘘をつくかは別途考えなければならない。

あらかた検索を終えた潮崎は、ハンドルに覆いかぶさるのをやめて体温で暖かくなったそれを優しく握った。空は依然として暗く、明るくなる気配は一切なかった。潮崎には二つの習慣があった。お気に入りの店でとんかつを食べることと度々前後するが、必ず行くこと。それは海を見に行くことだ。選択肢が与えられている時、大概の場合決断を終えている。それでいいと誰かに発する、もしくは行動に移すことが困難なのだ。海は勇気を与えてくれる。潮のさざ波が雑念を流し、陸風が体全体を後押しする。視界に入る雄大な自然が心と体の両方に励ましを与える。水平線に向かって叫ぶのも良いだろう。

時刻は十一時二十分、国道は車の量も多く飽きのないドライブだった。潮崎は片道一時間の公園に向かっていた。潮崎の家から海までは混雑時でも車で約二時間半の道のりだった。朝の海を見るため寄り道をする必要がある。知人の多いアパートよりも人気のない公園の駐車場の方が問題がないと判断した。

予定よりも十分遅く目的地についた。公園と駐車場は営業している会社が別のため深夜でも利用できた。窓を開けてから車のエンジンを切った。緊張の糸がほどけた潮崎は広子の方を見た。未だ小耳良い寝息をたてて扉にもたれている。

なぜ広子を選んだのだろう。

寝顔を横目に潮崎は考えた。広子と潮崎はよく似ている。母から逃げるために家を出した広子と、仕事と人間関係から逃げるために誘拐した潮崎。原因は違えど同じ逃避を選んだ者同士だった。誰でも良く、犯行に及んだ理由も衝動であった。潮崎自身も今日犯罪を犯すとは思っていなかった。それだけ広子が潮崎に与えたものが大きかったのか。いくら思考を巡らしても答えには行き着かなかった。

潮崎は再びハンドルに覆いかぶさり、そのまま目蓋を閉じた。

次に広子が目蓋を開けるとそこは暗闇だった。かろうじて見える外の景色は灰色の壁に囲まれていくつももの弱々しい灯りが背後へと流れていく。広子はこの光景をどこかで見たことがあった。先ほど、狸々亭に訪れる前に家々が吸い込まれるようにして消えていったものと酷似していた。

右の運転席を見ると女性の凛々しい横顔があった。光に淡く照らされては黒に染まるを繰り返している。非日常の風景で広子は恐怖を覚えた。この一瞬で何があったのか、両脇を占有していた家の数々はどこへ消えたのか、車で移動しているだけでは説明のつかないことが広子の目の前で起きていた。

「……あの」

「あ、広子ちゃん」

女性は反応を示すだけでそれ以上に語ることにはなかった。ひたすらにフロントガラスを見つめて暗闇に車を走らせている。微かに笑顔が戻ったかと思えばまた固い表情になった。オレンジ色の時計は九時五十分を報せており、一分すら経っていない。

「ここって」

「運が良いね。もうすぐだよ」

そう言われ進行方向を見ると、暗闇の集まる先に一つの光があることに気が付いた。米粒ほどの大きさだった光は徐々に大きくなり、広子の乗る車を包んだ。

あまりの眩しさに広子は両腕で目元を隠した。梅干しに似たしかめ面をしていると、だんだんと光に目が慣れてきた。

恐る恐る目を開くとそこは広大な海だった。地上数メートル上にかかる終わりの見えない道路、その右車線から見下ろしており、助手席側の窓からは頑強な岩肌の間から緑が見えかくれしている。そして女性の座る運転席の窓からは空から差す太陽の光が幾重にも輝く群青の宝石がどこまでも続いている。青の台紙に白の絵の具をポツポツと垂らしたような空は海とはまた違った透明感があり、それらをバックにフロントガラスを注視する女性が美しく見えた。

「広子ちゃんさ、なんで家出したの？」

女性は遠くを見つめる眼差しをそのままに、広子が答えられなかった質問をした。彼女の表情に以前のような困惑の色は伺えない。冷たく、どこか悲壮感が漂っている。声は変わらず優しさが滲み出ているが、それでも随分な変わりようだった。

広子が返答を渋ったのはそれがあまりにも恥ずかしすぎる理由であったからだ。同級生の普段の生活を観察しても広子と同じ感性、症状を持つ人は居なかった。そ

のため劣等感を感じ、情けなく思っていた。母にすらも打ち明けられなかったでしょうもない悩み。けれども隣に座る女性は広子に焦らなくて良いと慰めた。彼女になら話すことができる。広子は確信した。

「……決めるのが怖い。どっちか選んでって言われてもどうしてもできなくて。選んでそれが悪い方だったらどうしようとか考えちゃって。それで何も言えなかったらお母さんに怒られて。簡単だって……それで家出したの」

「教えてくれてありがとう。そんなに難しいこと考えてるなんて、広子ちゃんは大だね」

女性は、へその辺りで行き場をなくした広子の手を掴み、親指でそつと撫でた。暖かい、けれどどこかが違った。

「お母さんのこと嫌い？」

「分かんなくなっちゃった。いつでもお母さんのこと考えてるのに会いたくない……嫌いじゃなくて、怖いの」

「その気持ち、ちょっと理解できるよ。私は皆のことが嫌いじゃないけど、皆が何考えてるか分かんなくて怖くなる。広子ちゃんとは少し違うかもしれないんだけど、相手がこう思ってたらどうしようとか分かりようがない先のことまで考えて立ち行かなくなるんだよね」

「……」

「でもさ、安心してよ。私たちの想像してる以上に皆優しくて、裏もない。できないことがあっても、話せば分かってくれるんだ。助けてくれるし、一緒に頑張ろうって励ましてくれるよ」

「ほんとに？」

広子は小さな声で尋ねた。女性は数秒してから広子の方を笑顔で見た。

「もちろん。幸せだから、私達って」

広子は海を背景にした女性が、どうしようもなく美しいのに加えて自身よりもはるかに強く思えた。煌々と照る車内は何色にも彩られていた。

「提案なんだけど、私と一緒に住まない？ 東北の田舎で静かにさ」

広子ははっとした。違和感の正体に気が付いたからだ。広子は女性に母を重ねていた。広子を守り、楽しい場所に連れていってくれる。まるで母そっくりな行動が広子に錯覚を見せていた。けれども女性の背中も暖かな手も母とは違う。広子はどうしようもなく寂しく思えた。

「お母さんに会いたい」

「……そっ……かあ」

女性は小さく笑い、左へと車線を変更した。長く果てしなかった道路はもうすぐで終わりを迎えようとしていた。

「海、綺麗？ 私は運転してるからあまり見れないんだけど」

「うん……とっても綺麗」

そっか、と満足そうに言う女性は広子の想像する魔法使いそのものだった。

女性が車の運転を続けること二時間と少し。自然が広がる道路から離れ、市街地へとやってきた。線路沿いを走っていると広子に見覚えのある駅が見えてきた。遠くの動物園へ出発し、暗くなってから戻ってきた、母と喧嘩をした道がすぐ近くにある駅だ。

「お母さんの所行こう。家出しちゃって心配してるだろうから」

「うん」

覚悟は決まっていた。女性に押された背中が広子を勇気づけていた。ごめんさいと言ひ、抱きしめる。緊張はしていたが怖くはなかった。

女性は車を駅のロータリーに停めた。すぐに家に向かうと考えていた広子は少し戸惑い、確かな足取りで進む女性の後をついていった。そして向かった先は駅近くの交番だった。女性は広子に待っててと言うと中に入った。

「こんにちは」

「はい、こんにちは。どうかなさいましたか」

「相談がありまして、対応してもらえますか？」

「勿論ですよ。そちらの椅子にお掛けになってください」

「分かりました。ちょっと待って下さい」

扉の奥から女性の声と若い男性の声が聞こえた。まだ入ってくるなど言われた以上逆らうことはできない。広子は壁にもたれかかって片足を空中で揺らしていた。

「おいで」

女性が顔を出し、広子を手招きした。広子は女性に連れられて交番の中に入った。室内はカウンターで奥と玄関側が分かれていた。カウンターには防犯のチラシ、パンフレット、ボールペンや犬のマスコットが置かれている。若い男性はカウンター下から紙が大量に挟まるファイルを取り、一番初めの小さい紙を抜いた。男性は哑然とした表情を見せ、慌てた様子だった。

「……えっと、相談というのは？」

「誘拐してました。私を捕まえてください」

誘拐、この言葉の意味を広子は知っていた。学校の授業だけでなく母からも注意された、知らない人についてはいけないという言葉が脳の深くから再生された。

「誘拐？ なんて？ だって魔法使いさんは私を……」

男性はカウンターの奥へ広子を移し、女性に椅子へ座り、両手を頭に回すよう命

じた。女性は淡々とその処遇が当たり前かのように動いた。男性は神妙な面持ちでスマホでどこかに連絡をした。

「前園広子ちゃんだよ。お母さんから話を聞いてるよ。もう少しでパトカー来るから。怖かったよね、もう安心して良いから」

「魔法使いさん……」

広子は女性の顔を見た。目蓋を閉じて少しも動かない。地蔵のように、静かに呼吸を繰り返すだけだった。

交番に着いてからおよそ十分、サイレン音がどこからか鳴り、それは交番の前で止まった。パトカーのドアが勢い良く開くと中から母が走ってきた。

「ヒロちゃん！ どこ行ってたの！？」

「お母さん……」

母は広子に抱きつき、頭を何度も撫でた。体温が暖かく、腕の中にあることがたまらなく嬉しかった。

「ごめんなさい。家出して」

「ヒロちゃんが謝らなくて良いの、無事で帰ってきてくれたならなんでも！ 良かった……本当に良かった」

母の涙が白のシャツにしみた。体を微細に震わして、鼻水まですすっていた。お互い謝罪をした後、母は広子に待っててねと伝えた。

「広子ちゃんのお母さん、この度は誠に申し訳——」

破裂音が室内に轟いた。母が女性の頬を叩いたのだ。頬は痛々しい赤に染まったが、女性は逆上するでも逃げるでもなく母を見つめていた。

「謝って済むと思ってるんですか！？ ふざけないで下さい、私は安否が分からない間ずっと不安で怖かったんです。私でこれなんだからヒロちゃんはもっと怖かったに違いない！」

「……その通りです」

「お母さん！ 違うの、魔法使いさんは……」

「何が違うの？ 誘拐は悪いことってヒロちゃんも知ってるでしょ？ この人はいけないことをした。ヒロちゃんはこの人がしたのは悪いことじゃないって考えてるの？」

「……………」

お母さんは意地悪だ

広子は両手を握りしめた。広子は女性に多くを貰った。形のあるものから受け取ることができたか曖昧なものまで、様々だ。しかし広子は女性に何かを返せたかどうか。心当たりがなかった。少しでも恩を返すべきだ。

言葉は作った。後は言うだけ。これを言えば母は悲しむだろうか。変な子供とし

て笑われるだろうか。広子には負の方向に進む予感しかできなかった。だがこのまま女性が絶対的な悪としてあらぬ疑いをかけられる方が広子にとってあってはならない未来だった。

広子は覚悟を決めて女性と母との間に入った。

「魔法使いさんは私を助けてくれたの！ 誘拐は悪いと思う、でも……でも、そんなじゃないよ！」

広子は母の目を凝視した。必死に勇気を出して伝えた言葉は決して流暢ではなかった。女性が与えてくれたものの一割にも満たないだろう。それでも広子はひたむきに祈った。

母が広子に近づく。そしてまた抱き締めた。今度は情熱的な再会でなく、包み込むような抱擁だった。

「……分かった。ごめんね、意地悪して。勇気を出して言ってくれてありがとう。警察の人と一緒に外出していて。女の人とお話しするから」

広子は膝へと移った女性の手をそっと触った。

「……ねえ」

「大丈夫だから。行っておいで」

その言葉がすんなり頭に入ったのは、女性が魔法使いだからなのかどうかは分からなかった。広子は交番の男性に連れられ、室内の会話が聞こえない場所に移動した。車道と歩道の境界にあるブロックに男性は腰かけた。広子は泣きそうになりながら男性にたずねた。

「魔法使いさんはどうなるの？」

「逮捕されるんじゃないかな。一日家で拘束するだけでも法律は許してくれないから。でも、広子ちゃんの言葉が本当だと証明されれば、僕は情状酌量の余地はあると思うよ」

「……」

「そうだ、刑が確定するまで友達には今回のことは言わないでね。無罪になったら女性側次第で許可されるかもしれないけど、それ以外は名誉毀損になって——とにかくダメだからね」

「うん……」

母は広子の悩みに気が付いていたのだろうか。その上で質問を続けていたのか。母はあの時、色々な人に相談していると話していた。考えてはくれていたのだ。それが広子には合っていなかっただけで、言えば対応が変わっていたかもしれない。

広子は交番を眺める。扉から魔法使いが飛び出してくることを望んで。ありがとうと一言伝えるために。